

B型肝炎治療に光

ウイルス抑制物質特定

北大研究グループ 新薬開発へ一歩

北大遺伝子病制御研究所の高岡晃教授(47)は「免疫学」らの研究グループが、B型肝炎ウイルス(HBV)の人の細胞内への侵入を認識して免疫を活性化させ、ウイルスの増殖を抑える働きをするタンパク質の特定に成功した。ウイルスの増殖抑制や消失を促す新たな治療薬の開発が期待できるといふ。



高岡晃教授

1日付の米国の免疫学雑誌

誌「イミューニティ」の電子版で公表され、同雑誌の1月号にも掲載される。

高岡教授らは人の細胞内でウイルスや細菌の侵入を認識して免疫を活性化し、

その結果、ウイルスのR

病原体を排除しようとする「自然免疫」に着目。HBVの自然免疫について、人の肝臓の一部を移植したマウスを用いて調べた。

その結果、ウイルスのR

NA(リボ核酸)を認識し、増殖を抑えるインターフェロンの産出を誘導する働きがある肝細胞内のタンパク質「RIG-I(リグ・アイ)」の存在を特定。さらに、リグ・アイはRNAを認識して結びつく際、ウイルスの増殖を直接抑える役割を持つことも新たに分かった。

高岡教授は「リグ・アイがHBVの感染防御に重大な役割を果たしていることが分かった。新たな治療薬の開発につながるデータが得られた」と話す。

HBVに感染すると、一部は慢性肝炎となり、肝硬変や肝がんを発症する人も

いる。現在、HBVを完全に排除して完治させる治療はない。

ウイルス性肝炎に詳しい北大大学院医学研究科消化器内科学分野の坂本直哉教授(51)は「肝臓病学」は「今

の治療は、ウイルスを抑え込むだけだが、根元からウイルスを消し去ることができる可能性が出てきた。新しい治療薬に結びつく第一歩」と話している。